

奈良教育大学附属小学校における教育課程自主編成への不当な圧力と介入に抗議する（声明）

本年1月17日、奈良教育大学は学長名で「奈良教育大学附属小学校の教育課程に関する不適切事案のお詫び及び報告書について」を公表し、これに呼応するように文部科学省は、1月19日付けで附属校を置く国立大学学長に向けて「適切な教育課程の編成・実施」の点検を通知しました。

上記2つの文章における共通点の問題点は、以下の2点です。

- 1) 学習指導要領に則る教育課程を実施していない点
- 2) 職員会議の運用が適切でない点

私たち学校体育研究同志会（以下「体育同志会」）は、学校現場ですべての子ども達がスポーツの主人公になることを願い自主的な実践に取り組んでいる団体です。体育同志会は、これまでも主体的、民主的、科学的、実践的であることを大事にした民間教育研究団体として活動してきました。そして、誰一人取り残すことなく、すべての子どもにスポーツの楽しさを味あわせ、運動文化の意義と意味を学ばせたいと考え、その為に教育課程の自主編成に取り組んできました。その根幹には、学習指導要領そのものに準拠した教育課程をつくることではなく、子ども達の成長のためにはどのような教育課程が必要なのかを実践研究の柱に据えてきました。

このような私たちの立場から、今回の一連の対応は、教育現場の自由な教育実践を束縛し、教員を萎縮させるものでしかなく、断じて看過することはできません。

私たち学校教育に携わる者は、戦後一貫して何よりも目の前の子ども達や保護者に直接責任を負って教育することを責務としてきました。直接責任を負うということは、子どもや保護者を取り巻く社会や環境も十分理解した上で、今このときにどんな力を付けるのかを考えるということです。その議論をすべての教職員が対等な立場で行い、その結果を共有し学校、学年、各教科の教育課程に織り込む。これこそが「教育課程は、各学校で編成されなければならない」ということの本当の在り方だと考えます。これは、まさに奈良教育大学附属小学校のこれまでの教育活動そのものであり、これこそ先進的研究の成果なのです。その成果については、小谷隆男校長の「お詫び」（1月17日）の中の「本校の教員は子どもに対して実に丁寧にきめ細かく指導してきたことは間違いなく、驚くほど前向きに自分のことばで話せる児童が多いことも事実です」という言葉がすべてを物語っています。遵守すべきは、大綱的基準の学習指導要領そのものではなく、我が国の教育の根本にある教育基本法です。

教育現場の困難や危機が叫ばれている今、大切にすべきことは、学習指導要領を遵守し、指定された教科書どおり教えることではありません。学校運営において、管理職の権限を強めるというような教員統制をすることでもありません。ましてや、現場の教師や保護者の意見や声を無視し、何よりも子ども達への悪影響が懸念されるような不当な出向人事を無理矢理進めることではありません。上述のように子ども達が主体性を持ち、健やかに成長するためにはどうすれば良いのかを、現場教員が責任を持って熟考し行動できるようにすることです。

今回の奈良教育大学附属小学校における教育課程自主編成への不当な圧力と介入に対し我々「体育同志会」は、民主教育を守り育てる観点から、ここに強く抗議の意を表明するものです。